大東文化大学法学研究所報

第7号　平成元年2月

目　　次

黒い森再訪……吉岡　　進…… 1
外交能力と国家の態様……広井　大三…… 5
　　――連邦とＥＣの場合について――
法学部の情報化構想に寄せて……瓜生　洋一……10
　　――コンピューターは計算機にあらず――
雑　報……15

黒 い 森 再 訪

吉　岡　　進

1988年夏，私は「黒い森」を再訪する機会を得た。「黒い森」すなわち Schwarzwald は，西ドイツ西南部の一角，ライン河を隔てて東フランスと接する地方である。主として，モミ，エゾマツの類の針葉樹から成る大森林に蔽われた高原で，南北160キロ，東西60キロにも及ぶ広範囲の地帯である。葉の濃い緑が，あたかも黒々とした大波のように密生して連っているところからその名があるのであろうが，昔からの，神秘的で，おそろしい森といったイメージをもあらわしているのかも知れない。現在では，観光地，保養地として著名である。同地方は，我が国にとっては，比較的になじみのうすいバーデン・ヴュルテンブルク州に属するが，同州は，ベンツの本拠地があったりするドイツ自動車工業の中心地として，経済的には西ドイツで最も富裕である由である。

私は今から20数年前の1965年にその州の首都シュトットガルトに約3週間滞在したことがある。その主たる目的は，西ドイツの中で同州のみに設けられている素人裁判所（Gemeindegericht 自治体裁判所）を見学することであった。素人裁判所といっても，そこの裁判官は我が国の簡易裁判所判事と同様，主として裁判所書記官とか市町村吏員の経歴を持った人

が多く，少額事件を扱っている。その関係からか民事訴訟事件でも和解勧告に熱心なように見受けられた。偶々ある日傍聴したときは，午前中審理を予定されていた5,6件の事件がすべて和解成立により解決されていた。日本の裁判所では，和解勧告の際は，大体において裁判官は紛争当事者と交互に面接してその言い分を別々にきくのが通常で，双方の呈示額が一致してはじめて，一緒の席で面接するやり方であるのに反し，ここでは，はじめから双方一緒のまま裁判官が面接し，互いに相手の面前で言い分や希望する和解条件を主張させる。一方が真実と違うことを言おうものなら他方は「ナインナイン」(否々) と大声で叫んで，相手の発言を途中でさえぎったりすることもある。お互い相手方の言い分が自分のそれと大きく違うということで腹を立てて感情を高ぶらせ，相手方につかみかからんばかりの気勢を示し，手を相手の顔の前に差し出したり相手方の首を両手でしめるようなジェスチャーをする。また裁判官に向い両手をさし伸べ片膝をつき救いを求めるような身振をする。こんなことでは感情的に対立がひどくて円満な話し合いなど難しかろうと思っているうち，だんだん冷静になって，裁判官の説得に耳を傾ける。時に裁判官は背後の書棚からコンメンタールを取り出し，該当頁を開き，指で行を示しながら読み上げて，法律問題の解釈を当事者に教示する。いつの間にやら双方の主張は歩み寄りを見せ，ついに合意に達する。裁判官は和解条項を書記官に口授して調書ができ上ると，これで間違いないかと双方に念を押し，履行を確約させる。なごやかなふんい気のうちに，双方は互いに握手をし，また裁判官とも握手をして，「アウフヴィーダーゼーエン」といって帰ってゆく。そんな光景を見ることができた。ドイツ人は理屈っぽくて権利主張が強く，訴訟好きだといわれる。確かにその観察は当っているのであろうが，合理的でもあるから，争いをいつまでも続けて解決を長引かせることと，多少譲歩をしても早急に解決することとの利害得失を冷静に考慮判断して，妥協すべきところは妥協するものであることもよく納得させられたのであった。

さてシュトットガルトの西約50キロ，丁度黒い森地方の北の入口にあたるところにバーデン地方の旧都カールスルーエがある。この町も日本にはそれ程知られていないが，ここには西ドイツ憲法裁判所や連邦最高裁判所である Bundesgerichtshof (BGH) があり，いわば西ドイツ司法の中心地である。(ドイツでは伝統的に司法の中心と政治の中心とは別で，第二次大戦前ベルリンが首都であったとき，最高裁判所 Reichsgericht (RG) はライプツイヒにおかれていた。) BGH の法廷では，下級裁判所における黒の法服とは異り，裁判官も弁護士も緋色の豪華な法服を着用するので，法廷は重々しく，圧倒的な威厳に満ち満ちている。当時ここの調査官を勤めておられたオットー氏と親しくなり，種々説明をきき，法廷傍聴や図書室見学に便宜をはかっていただき，さらには長官のホイジンガー博士との面会の機会をも与えられた。

そのオットー氏が一日みずから自動車を運転して，カールスルーエからバーデンバーデンまで北部黒い森のドライブに連れて行って下さった。同氏は現在75歳健康は必ずしも勝れないようであるが，年1回クリスマスには欠かさずにカードに詳細な近況を付記して送って下さっている。

今回の黒い森訪問はその南方玄関口にあたるドナウエッシンゲンから入った。同市にある古城の庭には，ドナウ河の水源といわれる泉がある。しかしここはその上流ブリクアハ川とブレク川の合流点であって，本当の水源ではなく，ただ二つの川が合流してここから下流をドナウと呼ぶことになるというその始点であるにすぎないが，遠くウィーン，ブダペストをへて黒海にそそぐ長大な河としてまた美しく青き河として著名なドナウ河の源ということで観光の名所となっている。

黒い森の中心に近く，ドイツ最大の滝といわれるトリベルクの滝がある。落差162メートルというが，水流が一挙に落下するのではなくて，いくつもの岩棚に落ちては流れる段々の滝であるけれども，急斜面を轟音を立てて流れ落ちるさまは一見に値しよう。なおこの付近で鉄道は急斜面をらせん状に曲りながら登ってゆくので，その点でも著名である。

黒い森の中心都市フロイデンシュタットで変った交通信号を見た。止れの赤信号の丸い信号灯の中に秒針があり，赤色現示間に一回転する。これによりこの信号が赤を表示してからおよそどの位経過し，あとどの位すれば青色に変るかわかる仕組みである。これは保養地であるこの町の空気を少しでも排気ガスによる汚染から守るために，赤信号で停止した車に対しエンジンを止めることを義務付け，信号が青色になる直前になってはじめて，エンジンをかけることを許すという規制があり，そのための信号である由である。空気の清浄値が絶えず計測され，一定量以下になると保養地の指定が取消されるというような厳しい環境規準があるとのことで，空気の汚染防止には厳重な配慮がなされていることが理解された。

黒い森の中には，縦横にドライブウェイが通じているが，ヴァンデルン（探鳥，薬草探し，地質学的探査，原生林踏破等を目的とする山歩き）のためのコースも十分に整備されている。フロイデンシュタットの近傍クニービスからバイエルスボルンまでひんやりした森林の中を鳥の声をききながら路傍の花をめであるいは渓流に沿い，滝を見ながら10キロほどのゆっくりした山歩きを楽しんだ。歩き疲れたあとの美しい湖畔での休憩も楽しく，ドイツ人が家族連れで休暇を楽しんでいる姿も多々見られた。空気がきれいなせいか元気が湧き出る思いを味ったが，玉に疵は NATO のジェット戦闘機による低空の訓練飛行の騒音が時に折角の静寂を破ることであった。

黒い森北部の大都市バーデンバーデンは我が国にも名の知られた温泉保養地であり豪華優雅なカジノの設備もある。温泉といっても日本でのイメージと異り，病気治療ないし健康増

進のための飲用又は浴用が考えられているから健康的な落着いたふんい気である。

バーデンバーデンのフリードリヒ浴場の入浴法を紹介しよう。世界でも珍らしいという脱衣用ロッカーのキーをゴム紐で手首につける外一糸もまとうことのない男女混浴の浴場である。広々とした浴室は天井も高く，大理石で囲まれた浴槽は古代ローマの浴場を想起させる。入浴順序は次のとおり定められている。

1. 冷水シャワー（身体洗浄）5分。2. 摂氏54度の熱気の中に横たわって15分。3. 68度の熱気浴5分。4. 冷水シャワー少々。5. マッサージ係の職員が石けんをつけたたわしで全身を洗ってくれる8分。6. 冷水シャワー少々で石けんを落す。7. 45度の温泉蒸気浴10分。8. 48度の温泉蒸しぶろ5分。9. 36度の温泉への全身入浴10分。10. 34度の浴槽の底から湯が湧出る温泉への全身浴15分。11. 28度の温泉入浴（泳ぎも可）5分。12. シャワー8分。13. 18度の冷水への全身入浴少々。14. タオルにて水分拭き取り4分。15. 安静（ベットに横たわり毛布にくるまって休息）30分。以上のコースを経ると生命力が漲ってくるという医療効果がある。確かに旅のあかを落して疲れも一挙に吹き飛ぶ思いであった。

黒い森からは稍離れているが，同じバーデンヴュルテンブルク州の東部にホーエンツオルレルン城がある。日本ではそれ程有名ではなく，現に交通公社のガイドブックにも載っていないが，ヨーロッパでは有名な城である。シュバーベン地方へヒンゲン近郊の小山の上にあたりを見下すように建てられていて，ドイツ帝国の皇帝を出したホーエンツオルレルン家の城であり，城内の聖堂には啓蒙君主として高名なフリードリヒ大王の遺体の入ったひつぎも安置されている。第一次大戦の敗北及びその直後の革命で皇帝を退いたウイルヘルム二世の最後の居所となったところという。

ドイツといえばすぐ高速自動車道路アウトバーンが連想される。方々で片側二車線を三車線に拡張する工事を行っている様子を見た。速度制限はないからすいていれば時速250キロ位すぐ出せるが，あいにく最近は渋滞のため200キロ以上を出すチャンスはなかなかないそうである。200キロ以上のスピードを出していて事故があれば確実に死亡の結果を見るという。フランスでは一時の無制限は今では130キロに制限されている。理由はガソリンの節約のためというが，事故の方も減少したとのことであった。

それはともかく二度に亘る大戦やその前後の経済的な激動そして世界的にも緑の減少が叫ばれている時勢においてこの大森林が依然としてその偉容を誇っていることに感心するのであるが，最近は酸性雨の被害が出はじめているとのこと。種々対策を講じているそうであるが，その被害が最少限度に食いとめられることを願わずにはいられない。